

授業科目の概要

(国際文化学部国際文化学科)

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容
学 科 科 目	基 礎 科 目	専 門 基 礎 科 目	基礎演習
			グローバル社会論基礎

人文社会科学系の学びに必要なアカデミックスキルを、入学後最初の半年で身につけるゼミ。図書館の使いかた、インターネットを利用した資料の検索方法、レジュメの書き方、説得的な報告の仕方、論文の書き方など、高校教育で修得しているPC技能を確認しつつ、ワードやエクセル、パワーポイントを使いこなしてプレゼンテーションを行う方法を学ぶ。

(概要)
国際社会やグローバル化を理解するために必要となる基礎的な知識や枠組みを学ぶ。国際社会を理解するための大きな枠組みとして国家を中心とした国際関係論・国際法を背骨として、国際社会がどのようにして成立し、グローバル化の時代と呼ばれる時代に至るまでの歴史を国家を超えるグローバルな視座から肉付けする。さらに、国家というマクロな主体と、移民というミクロな主体との相互作用による社会変容を取り上げ、国際関係論と多文化共生論との接点や違いを理解させる。

(オムニバス方式／全15回)

(4回)
社会学の視点でグローバル化とは何か、さらには国際関係論や歴史学との接点を解説する。第1回では、グローバル化とは何か、学習の目的・意義、現在の課題など基本的な内容を紹介するとともにオムニバスによる15回の授業の内容を簡単に紹介する。第2回では、社会の近代化を、ヨーロッパから見た場合と、それ以外の地域から見た場合で比較する。具体的には近代化論と世界システム論と呼ばれる理論の間で起きた論争を紹介する。第3回では、メロンパンはヨーロッパ起源ではなく、アジアで「発明」されたモノであることから議論をはじめ、「植民地からの近代化」という新しい近代社会の捉え方を学ぶ。

(4回)
ブル『アナキカル・ソサイエティ』、ギルロイ『ブラック・アトランティック』、アリギ『長い21世紀』などの古典的な諸著作などを通じて世界資本主義と主権国家体系の形成・変容について多角的に検討、考察した上で、チャクラバルティ『文明の諸危機』などを扱いながら現在のグローバリゼーションの位相についての理解を深めていく。

(4回)
今日の国際社会では、経済や社会がグローバル化するとともに、犯罪も国境を越えて行われ、これらを規律する「法」の国際化が進んでいる。「21世紀の国際社会と法」をテーマとする3回の授業では、21世紀の国際社会における地球規模の課題を考えながら、国際社会のルールである国際法の基本的な枠組みと関連する国内法を学び、国際経済活動に関する国際社会の取り組みについて、ベトナムの事例を取り上げて考える。

(3回)
東アジアが西洋近代と接触し、世界と繋がっていく歴史を学ぶ。第10回と第11回目の授業では、それぞれ近代の中国と日本の事例をみていく。中国の場合、東アジアの伝統的な国家の在り方や国際関係が解体していく中で、その影響を色濃く受けるが、それとは対照的に、日本は明治維新により「近代国家」の仲間入りを果たし、中国、台湾、朝鮮半島に展開していったことを理解する。第12回目の授業では、近代中国における租界という外国人居留地について学ぶ。ここでは上海共同租界の事例を取り上げ、租界に住む中国人・日本人・英米を中心とする外国人が、複雑な利害関係・法律関係の中で、どのように紛争を処理したか理解する。

授業科目の概要

(国際文化学部国際文化学科)

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	
学 科 科 目	基 礎 科 目	専 門 基 礎 科 目	<p>(概要)</p> <p>グローバル化が進み、言語や文化背景の異なる人間との交流の機会が増えてきた。総務省によると、多文化共生は、「国籍や民族などの異なる人々が、互いの文化的ちがいを認め合い、対等な関係を築こうとしながら、地域社会の構成員として共に生きていくこと」と定義されている。本コースでは、国内外の多文化共生をめぐる様々な事例を取り上げ、多様性に基づいた支え合う社会を目指すために必要な基本的な概念、基礎的知識、多角的視座、異文化理解のための方法などを幅広く学ぶ。</p> <p>(オムニバス方式／全15回)</p> <p>(担当者全員/1回)</p> <p>第1回目は、オムニバス授業を担当する教員による各専門についての紹介および学習内容についての簡単な説明を行う。</p> <p>(4回)</p> <p>医療従事者として日本に入国・協働する外国人について4回にわたって考える。まず経済連携協定や技能実習生制度の導入の背景を理解すると共に、日本における外国人労働者の現状を知ることから始める。次に日本での就労にはどのような課題があるのかについて、具体的に把握するために、ゲストスピーカーを呼んでお話を聞きながら理解を深める予定である。第3回目では、医療福祉現場における外国人労働者との協働が持続可能になるために、日本語教育の支援などの具体例を取り上げ考える。最終日は、医療福祉現場における外国人労働者との協働が持続可能になるための解決策と一緒に探る予定である。</p> <p>(3回)</p> <p>文化的多様性に富む東南アジアの民族や宗教、マイノリティの問題について、講義とディスカッションを行う。第6回は、民族の分布や民族ごとに異なる言語の状況を学び、文化の違いを乗り越え、どのように国民としての統合を目指しているのかを日本と比較しながら議論する。第7回は、世界宗教が受容された歴史的な過程や、その基層にある精霊信仰を理解し、人々の宗教実践の特色と宗教間の関係を考える。第8回は、少数民族や外来系住民の事例から、国家との関係や共生の課題について思考を深める。</p> <p>(3回)</p> <p>現在、日本には約20万人のブラジル人が暮らしている。第9回はどのような地域にブラジル人が集住し、コミュニティを形成してきたのか、ブラジル人学校の活動やエスニックビジネスについて学ぶ。第10回はなぜ日本から遠く離れたブラジルから多くの労働者が来日するのかを日本人の海外移住の歴史や1990年の入管法改正から理解する。第11回では日本に定住する家族や日本育ちの若い世代のブラジル人がどのような経験をしているのか、かれらの置かれた様々な環境を考えながら共生の課題についてディスカッションする。</p> <p>(4回)</p> <p>第12回目は多民族国家中国についての講義。少数民族との共存の歴史を抑え、現在の中国による少数民族政策の成り立ちを学ぶ。第13回目は台湾が直面する第五の移民(=外国人花嫁)の波に対する政府の政策について学ぶ。第14回目は居留地形成を契機とする日本の出入国管理政策の成立、戦後の変化を見る。第15回は進展する多文化共生が今後日本にもたらす積極的な面に目を向けさせ、ディスカッションによる議論を進める。</p>	
			Intensive English	<p>総合的に英語の4技能を伸ばすための、英語集中強化コースである。留学に求められるTOEFL・IELTS・TOEICなどの英語能力試験のスコアアップを目指すとともに、特に日本人学生が苦手とするSpeaking力を伸ばすことを目標に置いている。そのため、上級・準上級・中級(Advanced, High Intermediate, Intermediate)という習熟度別クラスに分け、必修英語科目では十分カバーしきれない部分を補いながら、目的に見合ったスキルをさらに伸ばせるよう少数定員編成で実施する。グローバル時代に必要とされる英語のスキルをそれぞれの目的に合わせて積み上げていけるようなプログラムになっているため、このプログラムを利用して十分な英語力を十分に身につけることができると考える。</p>
			導入演習	<p>基礎演習で学んだ基礎的なスキルを駆使して専門領域の入門レベルの新書を輪読する。輪番で概要報告を行い、テーマを設けてグループに分かれてディスカッションを行い、それを短時間で要約して報告する、ということを繰り返し、参加型のクラス運営を行う。同時間帯に開講している他ゼミ生と交流する機会を設定し、共同で町にでてフィールド調査を行い、報告会を開くなど、人と人との関わりかたを学ぶ。</p>

授業科目の概要

(国際文化学部国際文化学科)

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容
学 科 科 目	基 礎 科 目	専門基礎科目 表象文化論基礎	<p>(概要) 表象文化とは何なのか？このリレー講義では、世界各地の絵画、デザイン、写真、映像、マンガなどのビジュアルメディアをはじめ、音楽、文学、神話、祭や儀礼、通過儀礼、ファッション、芝居、建築、ミュージアム、さらには女性、階級制度などを含めた幅広い表象文化を比較し、その表現のありかたと意味を解釈するとともに、歴史、政治、宗教などの社会・文化的背景とも関係づける。こうした視覚化された／されない事例を取り上げつつ、表象文化の概念と理論を説明しく。</p> <p>(オムニバス方式／全15回)</p> <p>(4回) 表象文化にまつわる多様な定義と表現を理解するためには、関連する理論と近年の研究動向だけでなく、さまざまな事例を知ることが大切である。授業では、中国や韓国の都市や農村で表現されている／消滅した民衆メディアや祭祀をとりあげる。受講者はこうした視聴覚文化や身体表現の表層と深層について考えていく。いままで知らなかった文化を「知る」ことで、自らの感性を「磨く」ことが大切である。</p> <p>(4回) 授業では英国の表象文化に焦点をあてる。古くから継承されてきた、また移民たちによって新しく持ち込まれた祭祀、中世から現在まで続いている階級制度、さらにビクトリア朝以降の女性解放運動を取り上げ、それぞれの発展過程を歴史、政治、宗教などの社会的背景と関係づけて考察する。映像を通して、今まであまり学ぶ機会がなかった英国文化を知ること、国際的な視野を広め、同時に日本文化と比較することでその特徴と独自性も学ぶように指導する。</p> <p>(4回) 映画など、現代のエンターテインメントには、儀礼や神話などのモチーフが用いられていることが珍しくない。特に、人がある社会的段階から次の段階へ移行する際に行われる通過儀礼はその典型である。身近なエンターテインメント作品に表象されている神話的、儀礼的要素を分析し、さらにそのモチーフに関連する儀礼について、ジンバブエの祖先祭祀で行われる音楽パフォーマンスの体験を通じて学び、ワークショップ、ディスカッションも開催する。</p> <p>(3回) 絵画の表象分析では、国境を越えて生きた画家たちのアイデンティティの模索と交差について、および写真の表象分析では、「人間の眼」と「機械の眼」との対峙と融合について、日本近現代の作品を中心に、西洋と比較し説明する。また、ミュージアムの表象分析では、フランス・パリのルーヴル美術館、ケ・ブランリー美術館、ホロコースト記念館などを事例とし、それらのコレクションと背景にある歴史、政治、文化とを関係づけて考察する。</p>
		情報系基礎科目	ICTリテラシ
			統計学基礎
専 攻 科	コ ア リ ン グ	グローバル社会 国際法	今日の国際社会では、経済や社会がグローバル化するとともに、犯罪も国境を越えて行われ、これらを規律する「法の国際化」が進んでいる。この「法の国際化」には、国内法の規律対象の国際化と伝統的に国際関係を規律してきた国際法の規律領域の増大・拡大の両面がある。この講義では、質疑応答や討論及び発表等を通じて、現代の人々の日常生活のあらゆる側面を規律する国際法について、関連する国内法も含めて、21世紀の国際社会における地球規模の課題を担当教員・他の学生とともに考えながら、国際法の基本的な知識を学ぶ。なお、授業では内容理解の補助手段として、関連する映像資料や図表等が必要に応じて提示される。

授業科目の概要

(国際文化学部国際文化学科)

科目区分			授業科目の名称	講義等の内容
学 科 科 目	専 攻 科 目	社会系科目	国際関係論	本講義では、複雑な国際政治や国際関係を認識し働きかけるための道具として、これまで培われてきた理論的視座を提供するとともに、そのような視座と関連の深い現象について取り上げ検討する。国際関係に関する多様な視点や論理を学び、また我々の日々の生活にも大きな影響を及ぼしかねない現象について認識を深めることを通じて、国際情勢についての単に情勢認識を行うことができるようになるだけでなく、自分の頭で国際政治・国際関係について考察し、個人や市民の立場からグローバルに考え、かつ自分の活動する場（ローカル）から働きかけるための知識を身につける。
		グ ロ ー バ ル 社 会 系 科 目	平和学	この授業では、平和学がこれまでに積み重ねてきた知に触れ、これらの問題に対するアプローチを探ることによって国際社会に生じる問題に主体的に取り組む姿勢を身につける。新しい形の暴力に対処するためにはどうすればよいのだろうか?その答えを見いだすことは容易ではない。本講では、上記のような問題関心から、現代世界の多様な暴力の原因を理解し、それらに対処する方法を模索するための素材を提供することを目的としている。まずは問題の現状を知るところから始め、原因の分析、様々な対処方法とそれに携わる人々の思想や運動を知るという順序で講義を進める。
			国際経済法	今日の経済活動は国境を超えて行われおり、経済活動のグローバル化が進んでいることから、経済活動の国際的な相互依存関係が深化している。国際通商分野を規律するWTO法だけでなく、国際通商以外の分野においても新たな国際的な法的規制が登場している。これらの状況を踏まえて、この講義では、前半において国際経済活動を巡る国際社会の取り組みを概観する。その上で、後半において国際経済活動に関連する地球規模の課題を取り上げて、各分野の法制度を考察する。この講義全体を通して、質疑応答や討論及び発表等を行い、国際経済活動に関連する法制度について、国際法及び国内法の両側面から21世紀の国際社会における地球規模の課題を担当教員・他の学生とともに考えながら、当該法制度の基本的な知識を学ぶ。なお、授業では内容理解の補助手段として、関連する映像資料や図表等が必要に応じて提示される。
			国際社会学	国際社会やグローバル化をより専門的・理論的に理解するために必要な考え方を学ぶ。まず、中級以上の国際関係論の教科書で「もうひとつの国際関係論」として取り上げられる世界システム論を講義の骨格として解説する。その上で、歴史学の最新の知見も交え、世界システム論の視座から近代史を捉えなおす。さらに、旧植民地の視点から社会を捉えなおす、ポストコロニアリズムの潮流の基本的な考え方を解説したうえで、近代のアジア太平洋地域の事例を中心に紹介し、国際社会の現実をより立体的かつ包括的に捉え、より公正な国際社会のあり方を展望する。
			グローバル化と人の移動	人やモノ、そして、通貨や情報が国境を越えて移動するグローバル化の時代とは何かを、ミクロレベルでの人の移動に焦点を当てて解説する。まず、移民という現象を理解するための枠組みを主に社会学の知見を用いて解説した上で、グローバルな人の移動が実は近代という比較的長い時代のスパンの中で過去にも見られた現象であるという歴史的な視座を養う。こうした人の移動に関する理論と歴史を概観したうえで、移民の目には社会がどのように映っているのかを解説し、多文化共生論を、理想論としてではなく、地に足の着いた議論をするために最も大切な視座を養う。
コア科目	多 文 化 共 生 系 科 目	多文化共生論	本講義では、近年の多文化共生の議論や日本へ来日する外国人労働者の状況を理解しながら、いかに地域社会での共生を促進していけるかを考えていく。特に、在日ブラジル人を事例に、かれらの来日背景や日本社会での生活経験について、家族移民や女性移民の視点ごとに紹介する。また、かれらの間で形成されるエスニック・コミュニティやそのネットワークの果たす役割について考察する。一方で、日本社会側の取り組みにも目を向け、外国人の増加に伴い、各地で展開されてきた地方自治体やNPO、ボランティア団体の活動を振り返る。その上で、日本社会におけるマイノリティとはだれか、かれらを取り巻く課題は何か、多様な人々が安心して暮らすことのできる多文化共生社会の実現について議論する。	
文化人類学		現代社会は異なる文化の人々とともに生きることが求められている。本授業では、異文化に対してどのように考え、どのように対応すれば良いか、その基本的な姿勢（自文化を基準とした理解の問題点）について学ぶことを目的とする。具体的には文化人類学が、これまで、どのように文化を調べ、どのように理解してきたかを、主に日本の事例を世界の事例と比較するなどを通じて紹介する。テーマとしては、セクシャルティ、ジェンダー、婚姻、家族、親族、宗教などを取り上げる。		
言語文化論		本コースの目的は、言語と文化がいかに経済や企業に大きな影響を与えるか、言語と文化がいかに世界中の歴史や人々の生活を変える力を持っているかについて、様々な社会的現象を通して理解を深めると共に、グローバル時代におけるリーダーあるいは地球市民となるための基本的な知識と概念およびその方法を言語と文化の観点から学習する。本コースは、毎回の授業のために課題文を読み、クラスで行われるディスカッションのために準備してくることが求められる。		

授業科目の概要

(国際文化学部国際文化学科)

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容
		華僑華人論	華僑華人社会の形成は古くは10世紀に始まる宋時代に遡るとされるが、東アジア経済が銀を通じて互いにリンクされはじめた近世に入りアジア各地に広く形成された。19世紀に入り再び海外移民のピークが訪れ、アメリカ大陸や大洋州にも向かうようになった。中国の改革開放後の昨今、再び多くの新華僑が先進国に向かっていく。華僑華人問題は古くて新しい問題である。本講義では、近代以降現在にいたる日本、朝鮮半島、東南アジア各地、大洋州、アメリカ大陸など異なる地域や国家毎にマイノリティとして存在する華僑華人社会の変容過程を紹介するとともに、華僑華人ネットワークの実態を知るとともに、各地に根を生やした華僑華人がその国の制度や風土によってどのように変化してきたのかについて比較分析の視点を獲得し、その社会的役割を理解する。
		ジェンダーと平等・差異	ジェンダーが私たちの生活にどのような影響を及ぼしてきたか／及ぼしているかについて、特に国際的、グローバルな事象をジェンダーの視点から考えるための方法を学ぶ。本講義では、①ジェンダー／セクシュアリティ概念の基本を学び、②国際社会におけるジェンダー課題と取り組みを知る、その上で、③日本に生きる私たちの立場性を批判的に捉えなおし、④グローバル化が加速する現代において、異なる場所、立場に生きるわたしたちが連帯(つながる)して、ジェンダーに関連する課題に取り組むための力を養うことを到達目標とする。
		多文化共生政策	多文化共生政策の基本的な枠組みの理解を確実なものとし、その上で国際協力や国際貢献、留学生支援など、国内外の多様なレベルの第一線で多文化共生政策展開において実践的な取り組みしてきた関係者の知見を受け止め、考え、検討する。その際、NGO、NPO諸団体の関係者、多文化共生社会の実現のため活動している人々、さらに多文化共生政策の立案・施行を専門とする研究者の体験から学びとる。また英語コミュニケーションによる異文化交流を軸とする学習環境を実体験することで、多文化・多元性を教育実践や社会のさまざまな場でどのように結び付けばよいかについて、自分なりの見方・考え方を身に着けることを目標とする。
表象文化系科目 コア科目		岡山学	本授業は環境文化学の視点に立ち、生活を共にする地理的社会空間としての「地域岡山」を地域・人間・文化・社会・歴史などの各方面からの複数の視点によって構成し、専門領域に限定されない自由な観点から講義される。「地域」では文化施設・地域建築、「人間」では事件を含む人物に注目し、「文化」では教育・宗教文化・食文化・洋学、「社会」においては民俗・芸能の事象を取り上げ、さらに「歴史」ではそれを総括的に取り上げる。授業総括者は各講義の関連性・総合性を意識して、「導入」と「総括」を担当する。講義は、ではゲストスピーカーも招聘し、随時議論の形式を用いて、「自らの理解を他者に伝える」方法を学ぶ。
		身体表象論	20万年に及ぶ人類の歴史の中で、文字が使われるようになってからわずか数千年しかたっていない。絵画や彫像などの表象文化を除けば、情報伝達に関するコミュニケーションの大部分は身体的な表現によって担われてきたとらえられる。本講義では主にアフリカの音に関連する身体やパフォーマンスによるコミュニケーション(音文化:おんぶんか)、すなわち、音楽、舞踊、儀礼、口頭伝承などを事例に表象文化について議論する。そのうえで、現代日本社会における身体表象の事例と比較し、日本における特に音を用いたコミュニケーションについて再考する。デジタル化、非接触などが進展する現代社会における身体性のあり方について各自が考察し、議論できることを目指す。なお、本講義では文字によらない(音による)コミュニケーション、パフォーマンスについて学ぶため、成績評価は文字を用いないプレゼンテーション(パフォーマンス)で評価する。
		日本文化論	この講義では古代から昭和に至るまでの日本文化の特徴を時代別に述べる。絵画、写真、映像などのビジュアルメディアをはじめ、文学、音楽、ファッション、芝居、建築などを含む幅広い文化を取り上げ、当時の人々(特に女性)の日常生活と歴史、政治、宗教などの社会的背景との関連性を考察させる。また明治維新後来日した外国人が日本文化をどのように解釈していたかについても、事例をあげて説明する。更に日本文化が世界に及ぼした影響についても考える。
		メディア論	授業のテーマは「戦争・メディア・ジャーナリズム」。日清戦争に始まり、アジア太平洋戦争の敗北で終わった対外戦争の時代。とりわけ満洲事変以降、日本政府や軍部・報道界・国民は、国力を総動員するために、「勝利」をうたうプロパガンダ(政治宣伝)を繰り返してきた。この授業では、アジア太平洋戦争終戦までの50年余りに及ぶ時代の推移とジャーナリズムの変化とを関係づけ、あわせて当時どのような通信技術を使って、いかなる戦況ニュースが伝えられたのかについても説明していく。新聞データベースを自由自在に操作できるようになることも目標とする。
		日本近代美術史	明治維新後、西洋をモデルとした社会のなかで、日本で美術はどのような役割を期待され、どのような様相を占めたのだろうか。本講義では、明治から第二次世界大戦頃までの我が国の洋画、日本画、彫刻、建築をはじめとして、西洋では「マイナーアート」とされた工芸や版画、さらには新しく加わったグラフィック・デザインを含めた各分野の代表的な作家および作品を紹介する。また欧米での「ジャポニズム」についても言及し、広く「アート」について考察することを目的とする。

授業科目の概要

(国際文化学部国際文化学科)

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	
学 科 目	専 攻 科 目	宗教人類学	特定の宗教を信仰していない人でも、初詣やおみくじ、宮参り、七五三、七夕、クリスマス、ハロウィンなど、超自然的な世界や存在にかかわる行事に参加したことのある人は多いだろう。このような日常の営みを、宗教的实践ととらえる。本講義では、宗教の教義や思想よりも人々の営みに焦点を当て、宗教的諸現象あるいは宗教的実践の人類学的解釈について学ぶ。宗教人類学の基礎的な知識、分析手法を身に付け、思想、慣習、行為等を包含する宗教的諸現象を自ら分析し理解する力を習得する。具体的には呪術、儀礼、シャーマニズム、宗教と政治、スピリチュアリティなどをキーワードに宗教人類学の研究成果を学ぶと同時に、インタビューやフィールドワーク等の調査に関する基礎技術を身に付ける。	
		日英比較文学史	この講義では18世紀から20世紀における英国と日本の女流文学や女性を主人公とした文学作品に焦点をあて、その起源と発展の過程を説明する。女性を主人公とした文学作品、あるいは女性によって書かれた小説、劇、エッセイ、詩などを取り上げ、各々の作品を時代、社会的、文化的背景とも関連づけ、その作品の文学的、歴史的重要性を述べる。映画化された作品については、映像を通して時代背景に対する理解を深めてもらう。更に日英の女流文学の国際比較を試み、類似点、相違点を受講生と共に考える。	
		文学と芸術	中国人は、おもしろくないことを許さない人びとであると思う。中国人が語り伝えてきた多くの奇譚は、不思議な違和感と謎に満ちている。中国の物語には物語の「文法」が、絵画には絵画の「文法」があり、それらを理解していなければ、中国の物語や絵は、正しく読むことはできない。古来、日本人が「中国的」と思い込んでいるあれこれは、実は「誤読」に満ちているのかもしれない。この授業では、中国の奇譚や絵画から、いくつかのテーマを選んで考察し、その背後にある世界観を模索してみたい。	
	グ ロ ー バ ル ス タ デ ィ ー ズ 科 目	近現代の日本	古くはキリスト教の伝来、長崎貿易の時代から、外国人の渡来とそれによってもたらされた海外の文化・技術・製品は、日本の経済社会の形成に大きくかかわっていた。とりわけ、幕末開港期から明治維新以降における欧米やアジアとの本格的な接触は、日本が経済発展を進めてゆくうえで多大なインパクトを及ぼした。この授業では、海外とのヒト・モノ・カネの動きとその受容に注目しつつ、主として経済史・産業史の観点から日本の近現代を論じる。	
		近現代の中国	清末から現代に至るまでの中国近現代の歴史について広く学ぶ。中国、とりわけ近現代以降の中国は日本にとって非常に重要な一国家であり、協調や対抗を繰り返しながら、日本の歴史にも大きな影響を与えてきた。この講義では、中国が歩んできた歴史について、同時代の日本の状況を比較しながら学ぶことで、中国独自の特殊性について知り、また、アジアの一国家としての共通性についても理解を深める。さらに、過去の中国の歴史的事象を通じ、現代中国の社会・文化とその課題について理解することにも繋げる。	
		近現代の欧米	この授業では、欧米の近現代の歴史を文化・社会のふたつの側面から取り上げる。第一は芸術と社会との関わりについてである。近代初頭（15、16世紀）のイタリア・ルネサンスと19世紀後半の印象派を比較しつつ、芸術とそれを取り巻く社会との関係がどのように変化し、われわれの知る芸術の「かたち」ができてきたかを展望する。もうひとつのテーマは、生と死をめぐる諸問題である。こうした普遍的なことがらにも実は歴史がある。ヨーロッパの近現代社会が人間の生や死とどのように向き合ってきたか、さらにはそれにどう関与し、どう操作してきたか、を考察する。全体として、今あるヨーロッパ的世界が歴史的にどのようにできてきたか、その一端を理解することに努めたい。	
			近現代の韓国朝鮮	近年、K-POPや韓国映画・ドラマが、日本でも広く歓迎され、韓国に関心を持つ人も増えた。これらがなぜ輸出商品として成功したのかを理解するためには、また、各シーンやセリフを理解するには、その背景にある歴史・政治・経済・社会についての広範な知識が必要であるが、これらを高校までに学ぶ機会を持った人は多くない。この授業では、近現代の韓国朝鮮について、歴史・政治・経済・社会などの諸分野からの多様なアプローチを試み、人々の日常生活や、日本とのつながりを意識しながら、全般的な講義を行う。
			近現代の東南アジア	近年、急速な成長を続けている東南アジアは、現在11の国民国家から構成され、民族や文化、宗教などの面で多様性に富む地域である。授業では、各国の基本的な知識を得た後に、国民国家の本質やその成り立ちを考察する。また、現状の問題を多角的に取り上げ、地域の政治、経済、文化を歴史的な視点を踏まえて検討し、東南アジアのダイナミズムへの理解を目指す。近年の社会問題についても検討し、日本を含む国際社会との関係を視野に入れながら東南アジアの過去、現在、未来を考える。

授業科目の概要

(国際文化学部国際文化学科)

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容
学 科 科 目 専 攻 科 目 グ ロー バ ル ス タ デ ィ ズ 科 目		アジア経済史	(概要) 東、東南、南アジア地域の経済史を、地域の横断的なまとまりや連関を考えながら概観する。欧米との接触によりアジアがどのように変容していったのか、工業化の進展や植民地化の問題について、多面的な視点から講義する。人の移動やモノの連鎖などに着目し、長期的かつ広域的な視点でアジア社会の特徴を学び、現代のアジアの人々の暮らしや経済活動についても理解を深める。 (オムニバス方式／全15回) (8回) グローバル化の始まりから20世紀初頭までの日本・中国を中心とした東アジアの経済史を講義する。銀の産出と流通、ポメラントの「大分岐論」とアジア、日中社会構造比較、杉原薫の「アジア間貿易」論、G.W. スキナーの市場論と中国経済の発展サイクル、などの主要理論を紹介しながら、アジア経済史に関わる論争発展の足跡をたどり、時系列に講義する。 (7回) 近代以降のアジア各地域の経済史を、現代とのつながりを考えながら特定のテーマに焦点を当てて講義する。第9回と第10回は、アジア域内で人の移動が生じたプッシュ、プル要因と、移動により拡大した商人や労働者の活動領域、その後の人口動態に与えた影響を見る。第11回から第15回については、生活に欠かせない様々なモノを通して、アジアにおける生産や流通、消費が近代以降にどのように変化したのかを学び、世界におけるアジア経済の位置づけを考える。
		国際地域情報Ⅰ	この講義では英国社会と現代の英国事情について詳しく説明する。英国の学校並びに大学教育、スポーツ、メディア、文学、食文化、階級制度、王室、年金、医療制度、政治、経済、移民の歴史など幅広いテーマを取り上げる。また英国について書かれた本、新聞・雑誌の記事や映像を使って、英国社会が現在抱えている家族、女性（特に働く女性）、移民、人種差別、宗教、社会福祉制度に関する様々な問題についても述べ、その解決策を受講生と共に考察していきたい。更に日本社会が現在抱えている問題との国際比較も試みるつもりだ。
		国際地域情報Ⅱ	書物による技術や制度の伝来、ヒトの流入もさることながら、日本が世界と本格的にかかわるようになったのはモノの交易からであろう。近代日本の輸出品は、第一次産品としての性格が強い銅・石炭・茶を除くと、絹製品・綿製品などの繊維製品を基軸としつつ、マッチをはじめとする多様な消費雑貨が総体として大きな位置を占めていた。そのことは同時に、これらの製造業の発展にとって海外市場がきわめて重要であったことを示している。この授業では、経済史・産業史の観点から、近代日本がたどったグローバルな展開に着目する。それを通じて、モノを介して世界とつながることの意味を学生とともに考えたい。
		国際地域情報Ⅲ	この授業では、戦後から現代にいたる「北東アジア」地域について関心を持てるように、2つのパートに分けて進めます。ひとつは、北東アジア研究をリードする世界の大学、研究機関、資料館、博物館などの「調査研究組織」について比較する。もうひとつは、私たちが取り巻く「北東アジア情勢」について、おもに紛争や対立を促したトピックについて説明する。授業ではパソコンなどの情報機器の持ち込みを必須とし、ウェブサイト上の関連情報を収集するノウハウや、データベース利用の方法など、履修者の情報スキルを高めることもめざす。
		国際地域情報Ⅳ	人々が社会生活を円滑に行うためには、そこに生きる人々の価値観に基づいて形成されるルール（社会規範）の存在が欠かせない。社会規範の一つである法もまた、それが妥当する社会の価値観に基づいて制定されている。日越両国関係が深まる中で、ベトナムの社会や社会と法との関係を知ることは、ベトナムやベトナムの人々を理解する上で重要である。この講義では、質疑応答や討論及び発表等を通じて、ベトナムの社会と法について、担当教員・他の学生とともに考えながら、日本やカンボジアなどとの異同にも触れながら、ベトナム社会及びベトナム法の基本的な特徴を学ぶ。なお、授業では内容理解の補助手段として、関連する映像資料や図表等が必要に応じて提示される。
		国際地域情報Ⅴ	東南アジアで最も人口の多いインドネシアに焦点を当て、多様性に富む社会がいかに成立したのか、人々はどのように生活しているのか理解を深める。前半は近世から現代に至るまでの歴史を日本との交流を交えて考える。後半は、開発や環境、都市化、国民統合、紛争などの現在の問題や課題について現状を分析し、その背景や原因について情報を整理することで、グローバルな思考力や課題発見、社会問題の解決に取り組む力を養う。また、授業内では、地域文化に関して調べた内容を発表し、情報の収集と分析の力を養う。

授業科目の概要

(国際文化学部国際文化学科)

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容
グローバルスタディーズ科目		国際地域情報Ⅵ	この授業では、中国の特徴を掘り下げ、長いスパンで中国文化や中国語、中国系人を理解する視点を獲得する。とりわけ日本・日本人との関係は重要である。似て非なる日中の文化の違い、相互に競いあい、学び合った近現代の両国を、とくに「人」の視点から学ぶ。別科目「華僑華人論」では各地に散在する華僑華人社会を多文化共生（制度の違い）という視点から考えるが、この授業では中国語や中国人に底通する意識に注目し、社会の特徴を見る。そこでキーワードとなるのが「繋がること＝ネットワーク」である。
		国際地域情報Ⅶ	南米に位置するブラジルは、ポルトガルからの独立後、ヨーロッパ人移民や日本人移民などの様々な移民を受け入れながら、多様な民族の構成によって国民が形成されてきた国である。本講義では、社会、経済の発展の過程からブラジルの成り立ちを振り返り、国家のモデルや国民形成の仕組みについて考えていく。その上で、近年のブラジルにみられる社会現象や課題、それに関する社会政策を具体的に挙げながら、現代社会の様々な問題について議論する。
		国際地域情報Ⅷ	貧困、紛争、干ばつなど、アフリカには負のイメージが付きまとうことが多い。一方でサバンナを駆ける野生動物の群れや、熱帯雨林の類人猿など、豊かな自然が注目されることもある。グローバル化が深化しつつある今日、世界とアフリカ、日本とアフリカはどのようにつながり、どのように影響しあっているのか。本講義では、アフリカの自然環境、歴史、経済、文化（言語、宗教）についての基礎知識を学ぶ。特に植民地主義に注目しその原因と今日に至るまでの影響について、理解を深める。アフリカに関するメディアや文献からの情報収集を収集し、それを批判的に検討することで情報分析する力を身に付けることを目指す。
		国際地域情報Ⅸ	この講義では、近代社会が大量の人とモノだけでなく、富や情報が国境を越えて移動した時代であることに焦点をあてる。とりわけ、アジア太平洋地域を行き来したさまざまな文化に着目し、近代化というものがこれまで理解されてきたような、欧米から世界へ広がったという図式ではなく、移動により西欧とそれ以外の地域が接触することで生じてきたという近年の学界的潮流を理解し、さらにはこうした事例を自ら調査し、報告するための力を養う。本講義を通じて、移動を生きた人びとの視点から国際社会を理解し、より公正な国際社会のあり方を議論できることを目指す。
専攻科目	体験実習科目	国内外研修プログラム	<p>海外の大学やNGO、企業等の訪問や現地学生との交流や協働等を通して、グローバルな視点で考え、各地域の社会の課題を発見し、その解決に向けて主体的に取り組む力を修得する。また、現地での調査や交流を通じてコミュニケーション力を高め、リーダーシップや他者との協調・協働により目的を遂行する力を体得する。</p> <p>【ベトナム研修】 ホーチミンにて戦争証跡博物館、歴史博物館、第五区チャイナタウンでは廟や市場を視察し、日本人商工会議所を訪問して日本企業や日本人の進出状況に関する講義を受け、ホーチミン法科大学では現地大学生と交流会を持ち、ダナンから世界遺産の町ホイアンに向かい、日本橋や中国人町、日本人墓、現地博物館を見学し、さらに交易港として栄えた中部、阮朝の都フエに向かい、遺跡の見学を通じてベトナムの歴史を学ぶ。</p> <p>【台湾研修】 台北市にて国立台湾博物館、故宮博物館、二二八国家紀念館参観、旧居留地迪化街、龍山寺などを参観、協定校である輔仁大学学生との交流会を実施し、ともに夜市を散策し、淡水方面では淡江大学から紅毛城、基督長老教会淡水教会を訪ねる。国内便飛行機で対岸廈門のそばの金門島に向かい、冷戦時期の遺跡と伝統的宗族社会のあり様を学び、さらに新竹客家コミュニティを経由して中部に向かい、眷村や外国人花嫁をサポートするNGO等を訪問して多文化共生の実態を学ぶ。</p> <p>【沖縄研修】 沖縄にて沖縄県立博物館・美術館、沖縄県平和祈念資料館、沖縄市戦後文化資料展示館・ヒストリートなどを参観する。これと同時に、琉球大学・沖縄国際大学学生との交流会を実施する。また、八重山諸島に向い、石垣市立八重山博物館・石垣市唐人墓や竹富島を訪問し、沖縄の歴史・文化の豊かな多元性、そして、沖縄が国際社会の変化の影響を強く受けつつも、島ごとに異なる言語や文化を持つ、極めてグローバルな社会であることを深く理解することを目指す。こうした理解や視座を養ったうえで、八重山地域の台湾系コミュニティである琉球華僑総会八重山分会等を訪問し、グローバルな沖縄社会における多文化共生の実態を学ぶ。</p> <p style="color: red;">※研修先については、変更が生じる可能性があります。</p>
		学科科目	

授業科目の概要

(国際文化学部国際文化学科)

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容
		国際交流現場体験プログラム	<p>在留外国人数は、法務省「在留外国人統計」によると、令和3（2021）年末現在で全国総数約280万人、岡山県内約3万人となっている。本授業では、国際交流の現場体験を通して、日本と外国との交流の実態や岡山県内における在留外国人の生活全般に係わる習慣や認識、行動の違い、そこに起因する問題点を浮き彫りにすることで、文化の多様性と相対性を体現し、望ましい国際交流や多文化共生の在り方を探る。国際交流の現場体験は、5日間のインターンシップを希望により国際交流に係る自治体の担当部署、NGO・国際医療ボランティア組織、海外事業展開企業、技能実習生の就業する企業、インバウンドの宿泊・サービス業のいずれかで行う。インターンシップの前に全般的な導入、その後国際交流現場体験発表会と総括が行われる。</p> <p style="color: red;">※研修先については、変更が生じる可能性があります。</p>
学 科 科 目	専 攻 科 目	英語展開科目 Studies of Globalization	<p>(概要) 人やモノ、そして、通貨や情報が国境を越えて移動するグローバル化の時代とは何かを、ミクロレベルでの人の移動に焦点を当てて解説する。まず、移民という現象を理解するための枠組みを主に社会学の知見を用いて解説した上で、グローバルな人の移動が実は近代という比較的長い時代のスパンの中で過去にも見られた現象であるという歴史的な視座を養う。こうした人の移動に関する理論と歴史を概観したうえで、移民の目には社会がどのように映っているのかを解説し、多文化共生論を、理想論としてではなく、地に足の着いた議論をするために最も大切な視座を養う。</p> <p>(オムニバス方式／全15回)</p> <p>(4回) 社会学を背骨として、ローカルな事例を英語でグローバルに発信するための基礎力を養うために英文文献を読み込む。初回の講義では、講義の背景にあるグローバル化と社会の変容について取り上げ、講義全体の内容紹介や講義の進め方を説明する。第2回の講義では、そもそも近代社会とは何かを解説する。第3回の講義では、地域社会の事例をグローバルな枠組みの中で捉えなおし、ローカルな視座だけではなかなか気づかれない事例の意義を知るための手法を解説する。</p> <p>(4回) 英文文献の読解力を高めるために、世界資本主義と主権国家体系の形成・変容過程について書かれた古典的な著作を読んでいく。それと同時に、現在のグローバリゼーションがもたらしている諸危機を端的に伝えているドキュメンタリー映画などを見聞きしながらメモをとるなどして英語のヒアリング力を高めると同時に、現在の世界システムの位相についての理解を深めていく。</p> <p>(4回) 経済がグローバル化し、社会の多様化が進行する中で、社会を規律する「法」のあり方も変化している。この3回の授業では、国際社会のルールである国際法について、その歴史と変遷をたどりながら、国際法の基本的な考え方を学ぶとともに、国際経済活動とこれに伴う紛争処理制度に焦点を当て、グローバル化の中で国際社会が直面する地球規模の課題に対処するための国際法のあり方について考える。</p> <p>(3回) 東アジアを中心とする歴史学の立場から、グローバル化がもたらした社会の変化について理解する。第10回目の授業では、清末以降、西洋的な近代国家を目指す中国が、社会や国家体制の改革を進める中で、様々な変化や矛盾を経験したことを学ぶ。第11回目の授業では、近代日本について、中国の事例と比較しながら、その特殊な点について理解した上で、ディスカッションを行う。第12回目の授業では、上海共同租界という場を取り上げ、国籍を異にする外国人らがどのように共存を図ったかを学ぶことで、グローバル化による社会変化の一例を理解し、それへの対処法について模索する。</p>

授業科目の概要

(国際文化学部国際文化学科)

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容
学 科 科 目 専 攻 科 目 英 語 展 開 科 目		Studies of Multiculturalism	<p>(概要) グローバル化が進み、多様な価値観の共存が求められる時代に入った。異文化理解のみならず協働が求められる社会になった。本コースでは、国内外の多文化共生をめぐる様々な事例に、日本、東南アジア諸国、ブラジル、中国、台湾などを取り上げ、多様性に基づいた支え合う社会を目指すために必要な基本的な概念、基礎的知識、多角的視座、異文化理解のための方法などを幅広く学ぶ。そして日本社会における多文化共生の今後の在り方について一緒に考える。</p> <p>(オムニバス方式／全15回)</p> <p>(全担当教員/1回) 第1回目は、オムニバス授業を担当する教員(全員)による各専門についての紹介および学習内容についての簡単な説明を行う。</p> <p>(4回) 4回の授業を通して、多民族国家アメリカを例に取り上げ、その歴史的背景から現在の状況について、映像を利用しながら学ぶとともに、今後の日本における多文化共生について考える。まず第1回目では、アメリカが多民族国家になっていった背景を理解する。第2回目から3回目の授業では、多民族国家の現状と多文化共生の仕組みについて具体例を取り上げながら理解する。最後に、アメリカの多文化共生の在り方から学んだ内容を土台に、日本社会の多文化共生の今後について一緒に考えたい。</p> <p>(3回) 東南アジアを事例に、多民族、多宗教の国々における共生のあり方と課題について講義とディスカッションを行う。第6回では、東南アジア諸国の国民統合に至る過程を歴史的な背景から学び、各国の民族政策や言語政策について議論する。第7回では、東南アジアにおける宗教信仰の特徴を理解し、宗教に関する過去の紛争と現状を見る。第8回は、少数民族や外来系住民に対する多文化主義と同化主義の事例から、今後の日本社会における多文化共生についてディスカッションを行う。</p> <p>(3回) 現在、日本には多くの南米人が暮らしている。第9回はどのような地域に南米出身の人々が集住し、どのようなコミュニティを形成してきたのかを学ぶ。第10回はなぜ日本から遠く離れたブラジルやペルー、ボリビアから多くの労働者が来日するのかを日本人の海外移住の歴史や1990年の入管法改正から理解する。第11回では日本に定住する南米人の家族や日本育ちの若い世代がどのような経験をしているのか、かれらの置かれた環境やかかれらのアイデンティティを考えながら共生の課題についてディスカッションする。</p> <p>(4回) 第12回目は文明による統合の視点から多民族国家中国について学ぶ。第13回目は日台間の被災地交流から見えてくる両国の外国人花嫁政策について学ぶ。第14回目は、日本における民族・文化の融合の実態について学ぶとともに、戦後の外国人コミュニティと昨今のいわゆる「ニューカマー」との違いを学ぶ。第15回目では日米ビジネスの比較から見えてくるマイノリティのエンパワメント効果を指摘し、ディスカッションによる議論を進める。</p>
		Global History	<p>現代の社会は、モノ・ヒト・カネ・情報などがさまざまな形で結びついている。そのような地球規模でグローバルに結びついた世界は、どのように生まれ、どのように変容してきたのか。この講義は国際的な視野の涵養を目的とし、ローカルな地域や国の枠組みを越えて張りめぐらされていくさまざまなネットワークなどについて、大航海時代以降の日本を含むアジア、アフリカ、欧米各地域の歴史をゲストスピーカーによる具体的な題材の紹介も交えながら解説する。グローバル化の様相を長期的な視点から学ぶとともに、今日のグローバル化した世界を複眼的に捉える視点を養う。</p>

授業科目の概要

(国際文化学部国際文化学科)

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容
学 科 目 専 攻 科 目 英 語 展 開 科 目	Cultural Representation Studies	<p>(概要)</p> <p>表象文化とは何でしょうか？この英語によるリレー講義の前半では、絵画、デザイン、写真、映像などのビジュアルメディアをはじめ、年中行事、祭、慶弔の儀式、建築、装いなどを含む幅広い英国の表象文化を取り上げ、その表現のありかたと意味を解釈するとともに、歴史、政治、宗教などの社会・文化的背景と関係づけて説明する。リレー講義の後半では、他者や自己は誰によってどのように表象されるのか。異文化を経験した者による他者の表象を分析し、その表現のありかたと歴史、政治、宗教などの社会・文化的背景の関係性を理解する。表象文化論の基礎知識を身につけたうえで、自ら課題意識をもって表象文化について調査、学習し、発表する能力を身につける。講義の1コマは休日等を利用して博物館でフィールドワークを実施する(第13回講義終了後の週末に予定。詳細は授業内で連絡する)。</p> <p>(オムニバス方式／全15回)</p> <p>(7回)</p> <p>英国はこれまでに3人も女性首相を輩出し、エリザベス女王も君主として70年間在位するなど、英国女性の活躍は目を見張るものがある。そのため英国では女性史研究も盛んで、表象を積極的に用いた研究も進んでいる。こういった状況をふまえて、この授業の前半では、近年の英国における女性史研究の動向を論じ、表象を使った研究事例として、女性参政権運動に焦点をあて、その表現のありかたを歴史、政治などの社会的背景と関連づけて考察する。第5回目からは、英国の年中行事、ファッション、英国貴族などの事項も取り上げ、英国が長年に亘り培ってきた独特の文化、継承されてきた文化遺産について、画像を通して受講生に理解してもらうことを目標とする。わかりやすい英語を使った講義を行い、英語によるディスカッションも取り入れる予定だ。</p> <p>(8回)</p> <p>大航海時代以降、グローバル化が急速に進展し、人々はそれまでは直接接触することのなかった人々や文化に触れることとなった。著しく外見の異なる人々や、未知の文化に出会ったとき、人々はどのようにそれらを理解し、文化の違いを乗り越えてきたのか。あるいは文化の違いは乗り越えられないのか。第9回では異文化を分析し理解するための学問として発達してきた文化人類学の研究誌について紹介する。文化人類学の成果は異文化理解に貢献してきた一方で、その文化を記述し表現する側のステレオタイプを拭い去ることはできない。大航海時代以降、探検家や宣教師、研究者、芸術家などがどのように他者を表象してきたか(第10回)。文化人類学が挑戦してきた民族誌(第11回)、民族誌映画(第12回)、展示(第13、14回)などの分析を通じて、他者表象の事例を学び、それを英語で表現することを目指す。</p>
	International Law	<p>国際法とは、国際社会／国際共同体の法であり、国家間・国家と国際機関との間の法的関係、国家・国際機関と個人との法的関係を規律している。21世紀は、グローバル化の影響を受け、アジア諸国が欧米先進国に追いつき、あるいは、特に経済面では欧米先進国を追い越しつつある。このような国際社会・国際共同体の変化に伴い、国際法の性格や機能も20世紀の世界とは大きく異なる可能性がある。この講義では、国際法の歴史、基本的な考え方、ルール等に焦点をあて、国際法の基本的な構造が紹介される。この講義を通じて、よりグローバルな視点から国際法を検討することで、21世紀の国際社会における地球規模の課題を担当教員・他の学生とともに考えながら、国際法の基本的な知識を学ぶ。なお、授業では内容理解の補助手段として、関連する映像資料や図表等が必要に応じて提示される。</p>
	Japanese Culture	<p>この講義では日本の文化について英語で説明する。年中行事、風俗習慣、食文化、文学、伝統的な演劇、能、狂言、歌舞伎、大衆芸能、伝統芸術、工芸、建築、住居など様々な分野を取り上げる。日本は2000年余りの歴史の中で、欧米、中国をはじめとする海外の文化を吸収しつつも、独自の文化を築き上げてきた。このような歴史的背景から多彩な要素を持つに至った日本文化の特徴を考察していく。また明治維新後に来日した外国人が日本文化をどう評価していたかについては、彼らの残した自伝や旅行記を用いて探究する。更に日本文化が海外の文化に与えた影響については受講生とともに考えを深めていく。</p>
	Language and Culture Studies	<p>このコースの目的は、グローバル化時代における多様な価値観、文化、考え方を認識し、それらを受け入れ、共存できるように、グローバル時代における言語と文化の捉え方と言語と文化がもつパワーについて具体例を取り上げながら、言語と文化に関わる基本的な学術理論、概念を学ぶ。また、英語で授業を受講することにより、英語の専門知識を獲得し、英語で学術的内容を理解し、実践的英語コミュニケーション力を向上させることが期待される。</p>

授業科目の概要

(国際文化学部国際文化学科)

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容
専攻科目	英語展開科目	International Relations	本講義では、複雑な国際政治や国際関係を認識し働きかけるための道具として、これまで培われてきた理論的視座を提供するとともに、そのような視座と関連の深い現象について取り上げ検討する。国際関係に関する多様な視点や論理を学び、また我々の日々の生活にも大きな影響を及ぼしかねない現象について認識を深めることを通じて、国際情勢についての単に情勢認識を行うことができるようになるだけでなく、自分の頭で国際政治・国際関係について考察し、個人や市民の立場からグローバルに考え、かつ自分の活動する場（ローカル）から働きかけるための知識を身につける。原則として指定した教科書に沿って講義を行う。
		Economic History	<p>(概要)</p> <p>世界経済史の基本的な内容について英語で講義する。16世紀以降のグローバル化がどのように始まり、どのように波及を遂げてきたのかについて、地球規模の交流や相互依存関係に注目しながら検討する。特に17世紀の産業革命以降、豊かな国と貧しい国の格差が拡大してきた理由を考えるのが目的である。日本を含む各地域の工業化や経済発展のあり方を理解し、現在生じている経済問題を歴史的な視野から洗い出し、グローバル化する経済が今後どこへ向かうのかという思考力を養う。</p> <p>(オムニバス方式／全15回)</p> <p>(7回)</p> <p>銀の流通と船舶技術の発展によって世界経済が密接に繋がった16世紀以降から戦後超大国の出現までの時期を Global Economic History: A Very Short Introduction, (2011, Oxford) に沿って講義する。第1回から第3回は、銀の流通が促した、近世アジアの商業の時代の到来を学び、第4回と第5回はポメラントの大分岐論となゼイギリスで産業革命が始まったかを学び、第6回と第7回はアヘン戦争による西洋のアジア進出と第二次産業革命による超大国アメリカの誕生を講義する。</p> <p>(8回)</p> <p>産業革命期以降に世界各地で生じた経済変容とその影響を、工業化や植民地化、グローバル化、国際貿易体制の視点から学び、現在生じている格差や貧困問題についての思索を深める。第8回から第11回は、綿織物業の世界的な再編の事例や、植民地化によるアジア域内貿易の変化、19世紀以降の人の移動、アメリカやアフリカを事例とした格差や貧困の要因について学ぶ。第12回から第14回は、近代以降の日本経済を世界的な流れのなかで位置づけ、その特徴を考える。第15回は総括として、今後のグローバル化の行方についてディスカッションを行う。</p>
		Okayama Studies	本授業では、「英語で学ぶ岡山」をテーマとして、グローバル社会の一端としての地域づくりにつながる学際的な地域文化研究に取り組む。また、語学力（主に英語）や異文化理解力を高め、グローバル化する地域社会に資する豊かな教養力も養う。具体的には、豊富な観光資源を有する岡山県内の観光資源調査と英語で案内（観光アテンド）する際に役立つ観光英語コミュニケーション（岡山に関する英語表現）を日本の文化的特性をふまえながら学ぶ。さらに、それらを海外からのインバウンド観光客にSNS等を通じて魅力的に伝える発信力も磨く。なお、受講にあたり、岡山県内出身、県外出身は問いませんが、基本的に【岡山】を研究対象とする。
		Practical English	コミュニケーション能力の育成に重点を置きながら、4技能（リスニング、リーディング、ライティング、スピーキング）を育成する授業である。到達目標は以下のとおりである。様々なジャンルや話題の英語を聞いて読んで、目的に応じて情報や考えなどを理解することができる。様々な話題について、目的や場面、状況等に応じて英語で話すこと〔やり取り・発表〕ができる。様々な話題について、目的や場面、状況等に応じて英語で書くことができる。複数の領域を統合した言語活動を遂行することができること。
		English Presentation	様々な場面に合ったプレゼンテーションを行うために必要なコミュニケーションスキルを紹介する。特に英語での発表の進み方と主流の方法を説明する。学生は、教科書のトピックについて短いプレゼンテーションを準備し、実施します。内容と伝え方に注意が払われる。また、学生たちはグループディスカッションに参加し、自分の意見を述べたり、支持したり、質問したり、答えたりすることが期待されます。相互フィードバックを生かしながらコミュニケーションがスムーズに進むために必要な自信を身につけていく。

専攻科目
英語展開科目

授業科目の概要

(国際文化学部国際文化学科)

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容
実践 外国語科目	Project Based English	この講義では、グローバル企業や留学生が抱える課題等、学生が興味をもつ時事的な問題についてグループごとに調査を行い、解決策をグループで検討し、その結果を英語でプレゼンテーションを行う。これらの課程を通して、自分の興味を発見、課題を掘り下げることで自分なりの視点を持つことが期待される。また、交代でリーダーを務めることによってリーダーシップを養うとともに、英語でのコミュニケーション能力や課題や背景等のリサーチ能力の涵養も期待できる。
	英語学概説	「英語」の輪郭をつかむためのコースである。英語という言語が持つ様々な言語現象について探求し、基礎的な知識を身につけることが目的である。そのため、音声学・音韻論、語用論、統語論、形態論、意味論、英語史、英語コーパスに関する専門用語など幅広く取り扱う。幅広い角度から言語現象を理解するためには、英語や日本語以外の言語に触れることが理想的であるが、本コースでは、必要に応じて英語と対立的な面を多くもつ日本語を対照言語として扱う。
	総合インドネシア語Ⅰ	初めてインドネシア語を学ぶ学生を対象に、簡単な単語を使って、あいさつや自己紹介、現地での生活に必要なインドネシア語の日常会話の練習を行う。毎回の授業では、生活に関する会話文を用いて、日常よく使用する単語や文章の型を覚え、初歩的な表現ができることを目標とする。同時に基礎的な文法を理解し、短い文章の読解や作文をできるようにする。加えて、インドネシア語の成り立ちや特徴を理解し、インドネシアの文化や習慣についての知識を深める。
	総合インドネシア語Ⅱ	インドネシア語Ⅰを履修した学生を対象に、さらに実践的な会話の能力を高める。基本的な語彙や文法知識を学び、表現力の幅を広げ、相手の言っていることの意味や、自分の意見を述べる力を養う。動詞の諸形や、接頭辞、接尾辞、共接辞の用法を理解し、一つの単語からさまざまな意味が派生することを学び、語幹から辞書を使い、短い文章を読解できるようにする。また、実践的な手紙やメール、日記などを書き、表現する練習も行う。
	総合スワヒリ語Ⅰ	スワヒリ語はアフリカ大陸東海岸部の広い地域で使用される言語である。アフリカ大陸東海岸地域では古くからインドや中東との海洋交易が発達し、その結果アフリカの言語（バントウ系言語）にアラブ、ペルシャ、インドなどの言語的要素が加わってスワヒリ語が成立した。ケニア、タンザニアではスワヒリ語が公用語となっている。本科目ではスワヒリ語の基礎的な発音、文法、表現を学び、簡単な自己紹介と日常会話（買い物、交通機関での移動など）レベルの語学力を身につける。また、言語表現とともにスワヒリ語が話される東アフリカの文化を学び、総合的なスワヒリ語コミュニケーション能力を身につける。
実践 外国語科目	総合スワヒリ語Ⅱ	スワヒリ語の初級文法がほぼ理解でき、受動形や使役形などの派生形や、関係節などの複文が含まれた文章を読み、作文や会話ができるようになる。具体的な目標として、辞書を用いなく会話や作文ができること、初級テキストを読み、意味を理解し、説明できるようになることを挙げる。また、スワヒリ語が話されているタンザニアや東アフリカの文化についての理解をさらに深めるとともに、スワヒリ語が属するバントウ諸語の分布やその歴史についての基礎知識を身につける。
	総合ベトナム語Ⅰ	ベトナム語の初学者を対象に、言語学習を通して文化や暮らしの一端を学ぶ。学期の初めにまず耳慣れない発音の基礎に触れ、そのあと会話のテキストを使い、簡単なあいさつや日常よく使われる表現を学びながら時間をかけて正確な発音を身につけていく。聞き取りについては随時練習するが、自主練習も必要となる。語彙や文法的な知識の積み上げも同時に進めながら簡単な和文越訳ができるようになることも目指す。ベトナム語の発音や文法はこれまでの外国語学習でほとんど触れたことのない類型のものであるので、疑問に思ったことはすぐに講師に質問するなどして解消し、知識の積み残しを作らないことが肝要である。
	総合ベトナム語Ⅱ	総合ベトナム語Ⅰを履修した学生を対象に、さらに語彙や文法的な知識の積み上げと理解を進め、発話力や作文力を身につけていく。テキストで覚えた語彙のほかにも辞書などを積極的に利用して語彙力を補いながら表現の幅を広げ、簡単な読解にもチャレンジし、総合的な能力の向上を目指す。読解においては語と語の切れ目を見分け、それらの品詞が何かを見極める力が求められる。これには語彙力のほかに文法的な知識が必須であるので、前学期・総合ベトナム語Ⅰに引き続き疑問点を持ち越さないように努めることが望まれる。
	総合ポルトガル語Ⅰ	ブラジルのポルトガル語の基礎文法を学び、コミュニケーションに必要な表現を身につけていく。ポルトガル語の正しい発音と挨拶、現在形・過去形の動詞の活用を学習し、日常会話の表現や基本的な文の作り方を習得する。世界のポルトガル語圏で話されるポルトガル語と比較したブラジルのポルトガル語の特徴や、ブラジルの文化・習慣についても理解を深めながら、異文化を背景とする人々とのコミュニケーション能力を養う。中国地方には多くのブラジル人が住んでいるので、ポルトガル語は身近な言語でもある。異文化への関心を高め、将来的に簡単なポルトガル語会話が実践できるようにする。

授業科目の概要

(国際文化学部国際文化学科)

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容
学 科 科 目	専 攻 科 目	総合ポルトガル語Ⅱ	総合ポルトガル語Ⅰに引き続き、ブラジルのポルトガル語の基礎文法、コミュニケーションの表現を学んでいく。総合ポルトガル語Ⅱではより豊かな過去・未来の動詞の活用や使い分け、感嘆文や比較の表現を学習する。文法の知識を高め、語彙を増やししながら自分の意思をよりよく伝えられる文の作り方を習得する。ブラジルのポルトガル語の特徴や、ブラジルの文化・習慣についても理解を深めながら、異文化を背景とする人々とのコミュニケーション能力を養う。中国地方には多くのブラジル人が住んでいるので、ポルトガル語は身近な言語でもある。異文化への関心を高め、将来的に簡単なポルトガル語会話が実践できるようにする。
		実践中国語Ⅰ	全学共通科目の中国語を履修済み、あるいは既に中国語の基礎を習得している学生を対象とし、中国語でコミュニケーションがとれるようになることを目的とする。授業では、教科書を中心に、中級程度の文法や会話表現を学び、リスニング力・スピーキング力・ライティング力を総合的に育むことで、実践的な語学知識を身につける。また、語学の習得と同時に、中国の社会や文化についても学ぶことで、国際的な視野を有する人物の涵養を目指す。
		実践中国語Ⅱ	「実践中国語Ⅰ」からの継続で、より高度な中国語コミュニケーションがとれるようになることを目的とする。中級程度の文法や会話表現を学び、より高度なリスニング力・スピーキング力・ライティング力を育むことで、実践的な語学知識を身につける。授業では、教科書だけでなく、中国語の新聞や専門雑誌の記事などもテキストとして使用し、これらを実際に読み進め、議論を行うことで、異文化交流・調査研究の助けとし、国際的な視野を有する人物の涵養を目指す。
	卒 業 研 究 関 連 科 目	研究演習Ⅰ	本授業は、指導教員の研究領域（特定専門地域・理論）の内容について演習形式（参加型・ディスカッション）によって学生と問題意識を共有する。授業内容は教員によって異なるが、フィールドに特化するゼミ、学術論文の精読を重点的に進めるゼミ、原典の資料精読に重きを置くゼミ、外部との交流を多く取り入れるなど、実際の研究とはどういうものなのかを教員や仲間と一緒に体験する。教員は学生が蓄積してきた本学での学びの履歴を把握し、学修後半期の学びに指針を与えることが重要となる。
		研究演習Ⅱ	本授業は、学習の総まとめのための肉付けとしての指導を行い、次の「卒業研究」での卒業論文作成に向けた準備を行う。今まで培った知識・技能・思考力・分析力を活用し、課題の設定、関連情報の収集・分析、既存研究のまとめまでの進捗を目指す。演習形式の本授業ではその長所を存分に活かすために、意見発表や意見交流の場を設ける。そして卒業論文の基本構成の決定や、論文作成に必要な情報収集、既存研究のレビューなどを指導教員の助言をもとに行う。
		卒業研究	本授業は、学習の総まとめとしての卒業論文作成に向けた指導を行う。今まで培った知識・技能・思考力・分析力に加え、研究演習ⅠⅡで積み上げた知能・技能を活用し、課題の設定、既存研究のレビューからさらに高度な関連情報の収集、理論に基づいた考察、立論を行い、説得的な論文を構築する。クリティカルな考え方を身につけるだけでなく、ゼミ生の意見に耳を傾け、実践に結びつけることも重要である。1月に口頭試問を行う。口頭試問は、原則として指導教員が主査、その他の教員が副査を務める。提出された論文の内容を総合的に評価する。